



パプアニューギニアの人たちは姓の「タカハシ」が発音しにくいらしく、「タカシ」と呼ぶ。

「パプアで津波発生。多数の死傷者」。そのニュースを聞くと、「タカシ」の生活は一変した。

勤めていた鹿兒島の水産会社を退職し、その日までの給料十六万円を手にとると、航空券を購入。福岡へ出て関西

空港を経由し、被災地のアイタペには二十三日午後についた。少なくとも一カ月は救援活動を続けるつもりだ。

アイタペは青年海外協力隊員として、一九九三年暮れから三年間、職業訓練校で漁業指導をした思い出の地だ。

付近の北西海岸一帯は、巨大津波で数千人が死傷した。行方不明者も多い。朝八時すぎから夜七時ごろ

まで、日本から派遣された民間医療チームの負傷者治療に同行。英語が変形した、現地人のピジン語の通訳として、患者の訴えを医者に伝える。

その合間に、かつての十二人の教え子や学校の同僚、漁業実習で世話になった村人の安否を探っている。同僚の一人は、妻や子供と入り江の奥の実家に行く途中で津波にあ

って亡くなっていた。

生存者には「頑張れ。ほくと一緒に漁業で被災地を復興させよう」と励ましている。

漁業理論は北大水産学部で学んだ。人間関係が希薄な日本に比べ、協力隊員として暮らしたパプアでの印象が強烈だった。「いったん仲間になれば、肩ひじ張らずに、心からつきあえる連中ばかりだった」。ヤシの葉を地面に敷いて寝ることなど、全く気にならなかった。日本に戻ってからも、少しでもパプアに近い場所でも働こうと、鹿兒島の会社を選んだ。

パプアの人たちが漁業で自立した生活ができるようになるのが「タカシ」の夢だ。

目標は十年後。日本で漁業の実践経験をさらに積み、パプアに腰をすえるつもりだ。

文・写真 高木 和男